

イギリスに収奪される 植民地インド

ムガル帝国の衰退・滅亡と インドの植民地化

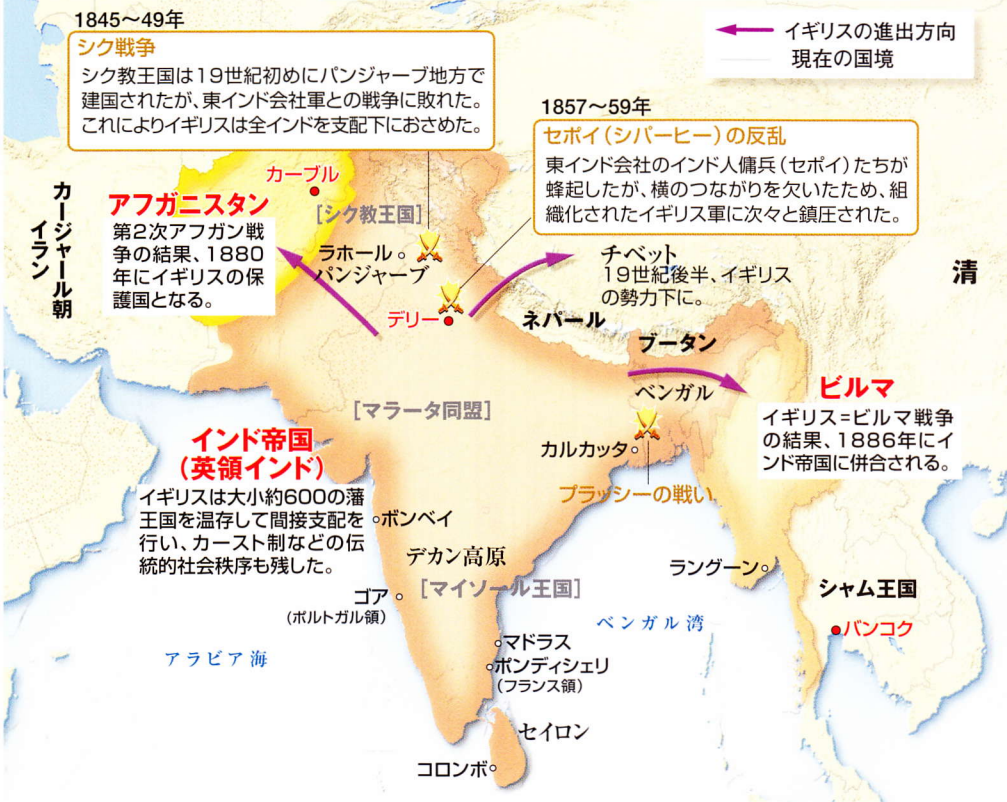
1600年に東インド会社を設立し、ポルトガルやオランダに続いてインド洋交易に参加したイギリスは、以後本格的にアジアへ進出した。イギリス東インド会社は1757年にブラッシーの戦いで、フランスと結んだベンガル太守軍を破り、65年にはムガル皇帝からベンガル地方の地稅徴収権を獲得したほか、諸王国を次々と征服。19世紀半ばのシク戦争でパンジャール地方を獲得した結果、インド全域を支配下におさめた。

イギリスは地稅確保のため、納税者にだけ土地の所有権を認めたことから、地主や農民の多くが没落した。また、産業革命（P98参照）が進んだイギリスから機械生産による綿布などが大量に流入するようになり、インドの手工業者を圧迫した。そのため、イギリスに対するインド人の不満は高まり、1857年、ついにセポイ（シパーヒー）の反乱が勃発した。この反乱は没落した地主や農民、手業者、さらにムガル皇帝をも巻き込んだインド大反乱へと拡大したが、組織化されたイギリス軍によって鎮圧された。その後イギリスはムガル皇帝を廃して帝国を滅亡させ、77年にはヴィクトリア女王を皇帝とするインド帝国を成立させた。

イギリスによるインドの植民地化

19世紀後半のインド

インドは18世紀に入ると次第にイギリスに支配されるようになり、19世紀に植民地化した。



東インド会社を使って
インド支配を進めたイギリスは、
ついにムガル帝国を滅ぼし、
インド全土を植民地にした。

Key Word 東インド会社 近世のヨーロッパ諸国で、アジアとの独占的な交易権を認められた企業。イギリスでは1600年、オランダでは02年、フランスでは04年に、それぞれ設立された。イギリス東インド会社は貿易の特許状だけでなく、条約締結や戦争遂行などの決定権も与えられ、アジアの植民地化を推進する先兵となった。